

## 先生インタビュー 渋谷教育学園渋谷中学校

田中 理枝子 先生

渋谷駅から徒歩7分という場所に、地上9階、地下1階という都市工学の先端技術が駆使された校舎を構える渋谷教育学園渋谷中学・高等学校は、「自調自考の力を伸ばす」「国際人としての資質を養う」「高い倫理感を育てる」という教育理念を掲げた、中高一貫の共学校です。

その中でもクエストは「自調自考の力を伸ばす」上で、中学3年時における欠かせないプログラムとなっているそうです。

また、グループワークやプレゼンは折に触れて普段からさせているため、生徒たちは教員側が特に促さずとも、毎年楽しんで取り組んでいます。

この授業に取り組んでいるのは、中学3年生約200名の生徒たちで、国語（表現）、道徳、LHRの3教科にわたって行なっているとのこと。

特に、国語の時間では「情報を集め、分析し、その結果や成果を発信する」という力を養うことを主眼に、スピーチやディベートなどを取り入れながら授業を行っており、その一環として

クエストを組み込んでいます。

**Q.** クエストを授業に導入するようになって、生徒たちにとってどのような変化があったと感じていますか？

**A.** まずは「社会」や「仕事」に直結するという体験が皆無に近い中学生の彼らにとって、そういったものが良い意味で身近に感じられるようになったのではないかと思います。

以下は、実際に生徒が言っていたことです。  
「毎日スーツを着て出かけ、疲れた様子で帰ってくるサラリーマンの父を見て、『つまらないそうだな』としか思わなかったけれど、そういう父のような普通のサラリーマンも、実はドキドキワクワクするようなことを会社でやっているということが分かって、父をはじめとするすべての大人たちに対する見る目が変わりました」

「将来、自分は普通に大学を出て、企業で会社員として働くのかな、つまらないそうだな」と思っていたけれど、そういう考えは間違っていたんだなということが

わかりました。逆に、早く企業で働きたいと思うようになりました」

「企業で働くって素敵なことだな、と思いました」

彼らが実際に企業で働くのは10年くらい先になると思いますが、そういう意識の変化は彼らにとって非常に意義のあることだと思います。

また、学校という閉じられた社会の中で外部の方々と接することが、生徒たちにとって大変よい刺激になっていると感じています。

生徒たちは企業から出されたミッションに対して、最初はかなり戸惑いますが、実際に協力企業の方々や教育と探求社の方々が来校されて色々とアドバイスをいただいたりしているうちに、段々と盛り上がってきたような感じがします。

最後の方は、放課後遅くまで残って、プレゼンに向けての準備にいそむチームも多く、生徒たちもかなり真剣に取り組んでいました。



**Q.** 周りの先生たちからは、どのような反応・変化がありましたか？

**A.** 本校は進学校ということもあり、「このようなことをやる意味があるのか」という声も最初は聞こえていました。

しかし、社会的にも「キャリア教育」の重要性が説かれていた昨今、「企業探求」の意義を感じる教員も年々増えていくように見受けられます。

もちろん、生徒たちが生き生きと取り組んでいる姿や、プレゼンの盛り上がりを目の当たりにして、理屈ではなく「このプログラムはなかなか素晴らしい」と感じた教員もかなり多いと思います。

不思議なことに、このプログラムを通して「今自分たちが勉強していることも、教科に関わらず、どこかで社会とつながっていくのかもしれない」という感覚を持つ生徒も多いようです。そういう生徒の姿を見て「進学校こそ、このプログラムに取り組むことが大切なのかもしれないですね」というような話を教員同士でしたこともありました。

**Q.** 授業を行う上で、先生が工夫していることはありますか？

**A.** 昨年度は、生徒たちに第一希望と第二希望の企業

への「志望理由書」を書かせ、それを教員が見て、一人ひとりの生徒に「採用通知」と場合によっては「不採用通知」を渡しました。

人生初めての経験（当たり前ですが）に、生徒たちはかなり興奮していました。このようにして、少し遊びの要素も取り入れて、雰囲気盛り上げるよう工夫をしてみました。

また、プログラムの前半は道徳やロングホームルームの時間を使って、教科に関わらず、生徒たちのことを最もよく知っている中3の教員全員が、数チームずつを担当する、という形で関わっていききました。

もちろん、口出しは最低限にとどめてファシリテーターに徹するようにしていましたが、普段から教科以外でも生徒たちと深く関わっている教員が担当をしていたので、最低限ではあるけれど適切なアドバイスができたのではないかと思っています。

そしてプログラムの後半では、国語（表現）の時間を多く使い、国語科の教員が最終仕上げのプレゼンに向けて、専門的なアドバイスをするようにしました。

**Q.** クエスト以外の、御校独自で行なっている取り組みはありますか？

**A.** 本校は「自調自考」を

根本理念としてすべての行事に取り組んでいます。

中学1年生から高校2年生まで、毎年秋に宿泊研修を行っておりますが（但し、中学1年生のみ日帰りの鎌倉研修）、そのときも研修先の研究テーマを自分で決めさせ、それに基づいて生徒たち自らに行程表を作らせております。

さらに、研修後も必ず事後学習として研修レポートを提出させたり、プレゼン大会などを行ったりしております。

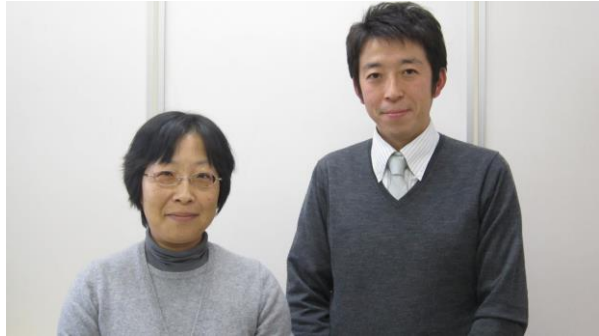
また、「自調自考」学習の集大成として、「自調自考論文」というものを高校2年時に全員提出させておりますが、そのときも論文のテーマ選びからすべて生徒たちに考えさせています。

本校では、そういった「自調自考」学習の一環としてクエストを位置づけております。このプログラムは、企業からミッションを与えられる、という形を取っておりますが、そのミッションを解決するためには、やはり、「自調自考」の精神なくしてはありえません。

また、クエストエデュケーションは、本校のプログラムの中でも教員以外の大人の方々と直に接することができる、異色のプログラムのため、生徒たちにとっても本当に良い刺激になっていると思えます。

## 先生インタビュー 伊奈学園中学校

藤間・嶋村 先生



埼玉県立伊奈学園中学校は“自彊(じきょう)創生”を校訓に「表現(国語と英語を融合した教科 翻訳・プレゼンテーションやディベートに取り組む授業)」、「国際(社会と英語を融合した教科 国際的な問題について学ぶ授業)」、「科学(理科と数学を融合した教科 文部科学省によるサイエンス・パートナーシップ・プログラムを使った授業)」といった学校独自の選択科目を行なう、全国でも珍しい6年間一貫教育の公立中学校です。

大宮駅からニューシャトルに乗ること30分弱、広大

な敷地を有するこの学校は、昭和59年に埼玉県のランドマーク(歴史的建造物)として創られ、高校も合すると現在2,700人近くの生徒たちが共に学んでいます。

2010年度から中学3年時の「総合的な学習の時間」を使って「進路探究プログラム『私の履歴書コース』」を行っています。

インタビューで訪問した当日は、ちょうど自分史(過去編)のクラス発表会でしたが、発表の仕方だけでなく生徒による作品の審査形式もユニークで、生徒たちが飽きることはないよう配慮された授業を行なっていました。

グループ毎に自分史をまわし読みして、その感想を本人のワークブックに直接書き込みフィードバックするというやり方や、全員の前で発表する生徒を選ぶ際には、一番印象に残った作品を書いた生徒のワークブックの裏表紙にシールを貼って投票するなど、自然にクラス全体で評価し合うという流れをつくっていました。

先生は、このようなやり方について「当日の1時間前に決めた思いつきです」と謙遜されていましたが、どうすれば生徒の学びを深めることができるか、ということを考えているからこそ、こういった柔軟な発想が生まれるのだと感心させられました。

**Q.** クエスト授業を導入するようになって、生徒たちにとってどのような変化・成長があったと感じていますか？

**A.** 藤間・やはり「コミュニケーション能力」に変化があったように感じます。クラスメイトと話す際に、以前に比べ、抵抗がなくなったり、他の子の新聞を読み、感想を持ちたりするなど、普段の教科の授業では、なかなか腰を据えて取り組むことが出来ないような学習を行えたので、生徒たちのコミュニケーション能力を育てることができたように思います。

嶋村・前半の授業では日野原重明さんや水木しげるさんといった、それぞれの人生を振り返るドキュメンタリー作品を作ることにより、先人たちの人生観に触れられました。私たち大人はどうしてもパワーポイントで表現していくというような発想ぐらいいか思ひ浮かびません。

でも、生徒たちは紙芝居や寸劇などを取り入れ、自由な発想で先人たちの生き方を魅力的に表現してくれました。

こういった「パワーポイントには頼らない表現力」というのは、生徒たちがじっくりと話合っていく中で生まれたもので、普段の教科の授業ではやりたくてもなかなかできない取り組みです。この授業を通して、表現力という部分ではかなり力が付いたのではないかと思います。

**Q.** この授業をする中で、先生たちはどのような工夫をされていますか？

**A.** 藤間…2点あって、ひとつは時間をきっちり区切って、限られた時間しか与えなかったことですね。敢えて意図的に突き放すことによつて、自分たちで期日を決めて段取りする力とか、学習計画作りというものをさせました。

そうすることによつて、生徒たちは自然と与えられた時間内に終わらせようと授業時間を有効に使う努力をしていたし、終わらなければ自主的に放課後残ったり、朝早く登校してパソコンルームで作業したりする生徒が結構いましたね。

もう一つは、教師は非常に苦しいのですが、後半の授

業で自分史を書く際、生徒一人ひとりと面談しました。全員の生徒の話を面談し終わった後は、魂を抜かれたような感じでした。

なぜ、そのようなことをしようと思ったかというところ、授業をやっている中で「これは生徒と面談しながら、筋道を示していったほうが自分のテーマや考えを整理できるかもしれない」と二人で相談した結果、自然な流れで思いついたことです。

「どういう新聞を書いたらよいのかわからない」と、生徒が言うので、私たちは「将来の希望は何か」ということや、「一番印象深かったことは何か」、「聴き手が一番聞きたい情報は何か」ということを面談しながら彼らの情報に軽重を付けてこれがよいというのを小まめに面談しました。

嶋村…生徒たちだけで自分史をまとめると、これまでの生い立ちを時系列に沿って並べるだけになってしまい、一人ひとりの個性や特徴が見えてこないことが多いです。

そこで格好よく言えば問答法のような感じですが、その面談の過程で「これはどういうこと？」と話しているうちに、生徒たちの中でこれまで歩んできたさまざまなエピソードに軽重が出てきます。

これまでの出来事を年表に

書いていく中で、自分では意識していないけれど、友達の間が多かったり、旅行のことが沢山出ていたり、そういったことを改めて構成し直してあげると、生徒たちは「ああ、そうなんだ」というように、次第に自分のテーマを絞れてきたように思います。

**Q.** ちなみに、その作業は全員に行なったわけですが、どのぐらいの時間が掛かりましたか？

**A.** 藤間…生まれてからこれまでの年表やエピソードを書く作業は個人差が当然出てきますので、できた生徒から持つてくるように指示して面談しました。全体に指示を出す合間を縫って、ワークシートを書く2時間か3時間の授業時間内で、全員の話聞いた感じですね。

でも、決して意図的ではないんです。いつも授業のある日の朝に、「どうする、今日？」という一言から始まって、その都度、目の前の生徒たちを生かすために、今は何が必要かと方向性を決めていった感じです。

嶋村…でも、そのように授業の方向性が決められたのも、テキストがしっかりあって、ほとんどアウトライオンができているからこそ、それに生徒たちを乗っけて足りない部分を私たちがサポートできたのだと思います。

す。

**Q.** そんな大変な作業を経て、本日ようやく（自分史の）発表会を迎えたわけですが、生徒たちの発表を見てどのようなことを感じましたか？

**A.** 嶋村：普段の生活の中で見られない新たな一面を見ることができて、生徒たちもそうだったと思いますがお互いが新しい視点でその友達を見るきっかけになったと思います。

藤間：それは、教師側にもありました。普段おとなしい生徒が、飼っている猫の死に直面し、段々と冷たくなつていく様を淡々と発表する姿を見て、「この子は、こういう経験をしてきて、今があるのか」と思い、感心しました。そういった背景は普段の姿からは、絶対に想像できなかった部分ですから。

嶋村：みんなの自分史を読んだり発表したりすることで、他の人の生き方を考えるきっかけにもなると思います。「大人とは何か」、「友達つて一体何？」といった、哲学的な問題に意識が向くというか。そういうテーマを真剣に話す生徒を見ると、やはり彼らのレベルで色々深めているんだなと感じました。

さらに、この自分史を書くにあたって、前半で「私の履歴書」を学んでいたのが

大きかったですね。螺旋的に学習が組まれていたのが重大な要素だと思います。中3のこの時期には自分史作りをする学校もあると思いますが、これまでの経験から、事実の羅列や「〇〇が楽しかった」などの単なる感想で終わってしまうことが多いです。15年間の人生について、テーマを絞って振り返るといえるのは相当難しいことです。

でも、前半で先人たちの歴史を読み解き、考えた時間があったからこそ、この自分史のテーマというか、伝えたい意図、構成がスーッと頭に入っていたのだと思いますね。

**Q.** それでは最後に、この授業全体を振り返ってみて感じたことがあれば教えてください。

**A.** 藤間：もっと時間を掛けて取り組ませてあげたかったなという思いが大きいですね。他の学習も並行しており、全体的にタイトなスケジュールで行なっているため、特に前半のロールモデルの作品づくりが消化不良に終わってしまったのが残念でした。

嶋村：入学すると、各学年で職業体験や環境問題についての調べ学習など色々なことに取り組んでいるのですが、とりわけこのプログラムについては、じっくりやらせてあげたかったなと

いうように感じました。

理想を言うと、2年でロールモデルのドキュメンタリー作品を一年かけて作り上げて、3年で自分史に取り組むという形が取れたら、もっと生徒たちの学びが深まったと思います。

藤間：生徒たち自身も、文化祭での（ドキュメンタリー作品の）発表が終わった後、「もっと、ここをこうしたかった、直したい！」ということを言っていました。短時間でやろうとすると、どうしても自分たちの中で方向性が固まってしまうから、修正が難しくなるし、その結果、中途半端な形になってしまつて消化不良になったかなと感じます。今日の自分史発表会のように、お互いが講評し合う中間発表のような場を持てたら、もっと作品を磨いて、深く内容を掘り下げられたと思います。

嶋村：それから、今回の自分史発表会で感じたのは、自分の心を解放できなかった生徒もいたのは事実です。この多感な時期に、同年代の生徒を前にして、洗いざらい何でも話せる生徒が多いとは限りません。でも一方で、たとえ解放できなかったとしても、他の生徒たちの作品を読むことで、自分の内面を語ることの素晴らしさや大切さを感じてくれたらいいなと思いました。

## 先生インタビュー 鷗友学園女子高等学校

木戸 英輝 先生



鷗友学園女子高等学校は東京・経堂駅の閑静な住宅街の中にあり、「慈愛（あい）」と誠実（まこと）と創造」を校训に掲げる中高一貫の女子高で毎年、難関大学へ多くの入学者を輩出している進学校です。

クエストエデュケーションの実施は、高校1年生のLHRの時間。初回授業に向けて、6クラスの担任の先生方が綿密な打ち合わせを重ね、準備を進めてきました。授業の後半、あるクラスでは、先生が自分自身の若い頃の職業選択のヒストリーを笑いを交えながらも真剣に生徒に語っていました。教員よりもっと給料が高い会社からの内定ももらっていたけれど、教育実習での生徒との交流の体験が忘れられず、人の成長に立ち会える教員という仕事を選ん

だこと、そして、そのことを今日に至るまで一秒たりとも後悔したことがないこと。世の中にはお金を超える価値があるんだというメッセージは気負いもなく、穏やかに語られ、でも確実に生徒に伝わっていました。

こんな風に先生個人のエピソードが語られるのも、先生を「フアシリテイター（支援者）」として設定しているクエストの授業の魅力のひとつです。

**Q. クエストをやるうと思っただけは？**

A. 以前から、生徒が机上だけでは学べないようなテーマ、例えば、社会とダイレクトにつながってアクションを起こすようなテーマを、本当の意味で主体的に取り組み、かつ、彼女たちの将来の糧となるような効果的なプログラムがないか、ずっと模索していました。そんな中で運命的に出会ったのがこのプログラムで、私たちの期待に応えてくれるのではと直感し、その詳細を検討すればするほど是非本校でも導入したいと判断するに至りました。

**Q. これまでやってきたキャリア教育の取り組みと、**

**クエストとの違いは？**

A. 20年前から、中学3年間みっちり使って「自分を知り、そこから他者へ、社会へ、徐々に外の世界へ目を向けていく」という方針のもと、自然環境や福祉、平和や進路について様々な授業を行ってきました。

例えば、中学1年生の夏休みに作成する「自分レポート」では、原稿用紙10枚にも及ぶ文章を書き、自身自身について、とことん考えるきっかけを与えます。また、高校では、自分たちが社会とどう関わっていきたいか、卒業生や企業の方々による講演会を通じて、自分自身の5〜10年後をデザインしていく、という取り組みを行ってきました。

クエストは、これまでのような取り組みとはまた違って、自らが社会に飛び込むことになるので、本当の意味で当事者意識を持って取り組むことができるものだと感じています。

例えば、これまで行ってきた職場体験などでは、1日だけの体験が多く、時には、企業からの説明を受ける「お客様」扱いでした。しかし、このクエストでは生徒自らが企業の一員となつて、その企業の理念や業務を理解し、企業が出すミッションに応えていきます。こういった点が、自らが主体的に社会に飛び込む

ことになると感じています。つまり、否が応でも当事者意識を持たなければ、このクエストのプログラムを成し遂げることができないのです。

私たちは当事者意識を持つてる人を「社会人」と位置づけています。それは「社会人」実社会で働いている人」という意味だけではなく、「社会人」社会を構成している一員であるという当事者意識を持った個人」と考えるならば、高校生であっても立派な「社会人」としての意識を持てるはずですよ。それを可能にする手段の一つがクエストのプログラムだと思います。

**Q. プログラムをやってみて、生徒や先生たちの反応はどうか？**

A. 生徒はとにかく楽しんでいきます。志望する企業へのエントリーの回では、意気込みが強過ぎて、こちらがびっくりするぐらいの真剣さでした。

先生たちの反応は色々ありますが、期待感と楽しみで一杯というのが大半の反応でした。また、生徒たちが楽しんで取り組むためには、まずは先生自身が楽しまなければ！という思いが強くあります。担当する教員は、みんな手探りで工夫しながら授業を進めているようです。

また、教師はどうしても教えたがりになってしまうので、つい生徒たちを見ると1から10まで口出ししてしまう。このプログラムは、我々教員が教師」ではなく「ファシリテーター（支援者）」としての立場で関わっていくので、教師として新たな能力が試されているのではないかと強く感じています。

授業を担当する先生の中には、他の先生方にも授業の素晴らしさを知って欲しくて、毎週クエストの授業報告を書き、教員が集うコミュニティスペースに張り出す先生がいるぐらい活気づいています。

**Q. 導入にあたって、障害になるものはあったか？また、それをどのようにクリアしたか？**

A. 先生の中には、外部のプログラムを使うことに対して悔しさを抱く人もいたり、やはり、教師であるからには自分たちの力で目指すべき教育の形を創造していきたいという思いがあったのだと思います。

しかし、そんな先生方にもクエストの目的や内容を知ってもらおう中で、既存のプログラムをそのまま使うということではないことに気づいてもらい、徐々に理解をしてもらえたように思います。

また、授業をするための日程調整も正直厳しいものが

ありましたが、教育と探求社から提案された年間スケジュールを参考に、LHRと情報の授業とで上手く連携しながら、授業日程を組むことが出来ました。特に、情報科の先生の協力を得て、情報の授業の中でクエストの企画会議やプレゼンテーション作成を実践できることになりました。

**Q. 最後に、先生が今後期待していることは？**

A. 1つは「生徒がどのように変化していくか」。これまでの学校内での授業とは違う形式なので、色々な体験をする中で生徒たちの表情がどう変わっていくか非常に楽しみです。

もう1つは、「どんな場面で失敗し、それをどうやって乗り越えていくのか」。ミッションに対して質の高いプレゼンテーションが出来ることも期待したいことです。が、それだけがクエストの目的ではないと思います。ミッションに向き合う過程の中で、生徒たちが受験勉強や日頃のテストと違う、点数ではない失敗や挫折を体験したとき、どんな学びを得られるのか。それとどう向き合い、乗り越えていく力を付けていくのか、これも今から本当に楽しみます。

## 先生インタビュー 桜丘高等学校

門 恭香 先生



愛知県豊橋市に位置する桜丘高校は「たくましい知性の育成」を教育目標に掲げる中高一貫の学校です。

一斉授業から開放されるクエストの授業は生徒の人気も高く、学内発表会には付属中学の生徒や保護者など多くの参観者が参観するにぎやかな行事になっています。

クエストの授業に取り組んでいるのは、高等部1年に所属する28名。10月から3月までの短い期間の中で、週2時間の「総合学習」を利用して進めています。

毎年冬休みは全国大会への作品を仕上げるために、冬期講習や部活動の合間を縫って意欲的に活動時間を捻出しています。

「冬休み明けの提出締切日、

晴れ晴れとした表情で作品を提出する生徒たちの姿を見るのが毎年の楽しみ」という門恭香先生に話を伺いました。

**Q.** クエストをやるようになって、どのようなところで生徒の変化や成長を感じますか？

A. 「学ぶという行為」、「社会の厳しさ」、「社会で生きていく事」それぞれに対して、とても謙虚な姿勢を示してくれるようになったと思います。

それから、「創造する喜び」を感じとってくれるようになりました。

私たちの学校では、前期の総合学習の授業で国際社会の諸問題を学び、その解決策となるアクションプランを作成し、学内発表をします。

それに対して、後期のクエスト授業では学習形態は似通っていますが、自校の枠を超えて作品を評価し合える、スケールのまったく違う場所「クエストカップ全国大会」が用意されているわけです。

そこでは企業の方から直接講評を受けることができ、自分たちの企画が、企業や社会で通用するのか確認をする事ができます。

そしてこのことが、どれほど生徒たちのモチベーションを高めるか、私たち教師はそれをしっかり知らしめられた6年間でした。日々の授業とは全く違う、ゼロから仕上げていくような創造活動や、ダイレクトに社会と繋がっているという現実感を持てる授業は、刺激の強い現代社会で生きていく生徒たちにとってはとてもモチベーションを高めやすいのだと思います。

実際、生徒たちの感想を聞いてみると、「この活動を通して、社会で生きていく自分の力というものを客観視することができた」という感想や「大人たちが、日々こんな大変なことに取り組んでいることを知って、少々見直した」等々、前向きなものが多いです。(笑)。

**Q.** 周りの先生方や学校全体として、どのような変化がありましたか？

A. 教師側の変化としては、生き生きとした生徒の反応や普段とは違った、生徒同士の対話を中心とする授業形態に触発されて、授業改革に取り組む先生が出てきたという点が挙げられると思います。



実際、社会科のある教師は、クレストの授業を担当したことをきっかけに現代社会の授業で、まずは生徒にレポートをメールで提出させ、授業内で発表をさせる、という生徒主体の新たな授業スタイルを確立できたと喜んでいました。

クレストのような新しい教育実践に対して、当初は消極的な教師も多かったのですが、プログラムがしっかりと出来上がっているのでも無理をさせることなく先生方にも担当を引き受けてもらえるという利点があり、その結果、このような変化を起すきっかけにつながったのだと思います。

また校内発表会では、毎回校長や教頭に審査委員をお願いすることによって年々クレストへの理解を深めてもらっていると感じています。

**Q. 授業の取り組みとして、先生が工夫していることはありますか？**

A. まずスタート時のインターン企業選択について、本校独自で作成した申込書を生徒に書かせ、企業の審査を経て採用・不採用が決まる、という設定で行っています。

このひと工夫によって、生徒たちに一層のリアリティとモチベーションUPを与えています。(生徒たちに

は内緒ですが：(笑))

それから、教師はファシリテーターに徹することを原則としています。生徒と深くかかわっていく事も同時に大切な教育活動とらえているため、担当教師も企業から出される課題(ミッション)については、しっかりと研究し、生徒へのアドバイスや意見への的確な応答に心がけてもらっています。(寝ても覚めても、ミッションのことばかり：：一時期、教師もこうなりませ)

でも結局は、まずは「教師も生徒も共に楽しもう！」ということをモットーに、とにかく楽しく進められるように心がけています。

**Q. クレスト以外の、学校独自で行なっている取り組みはありますか？**

A. 本校では、教科教育以外に「問題解決型」の総合学習にも大きな比重を置き、様々な教育プログラムを5年間一貫教育として進めています。

基本コンセプトとしては、中学時には問題解決学習の土台作りとして調査・研究・討議発表訓練などを行い、高等部では実際の地域や社会、企業と関わる中で問題解決学習を深めています。

具体的には、中学1年で豊橋市の野外施設で水質検査

や野草研究、水田作り等を実施し、まとめとして校内発表をするピオトープ(環境学習)活動を行います。

そして2年になると、アジア研究として韓国の言葉や文化、歴史を研究・調査し、韓国への修学旅行で実地学習を経て、3年では自由なテーマでの卒業論文制作にはいります。

高校進学後は地域・社会と具体的に結びつく活動へとシフトしていきます。高等部1年では前期にアジアの諸問題を研究、アクションプランの作成をし、夏休みには国際貢献活動として、フィリピンでのマングローブ植樹に取り組みます(希望者)。

そして後期から始まるクレスト活動。私たちはクレストエデュケーションを中学1年次から系統的に取り組んできた「問題解決学習」の総決算の場と位置づけています。

この教育プログラムの締めくくりとして、最後に社会や企業の営みを学び、実在企業の研修生となってミッションの企画プラン作成に挑み、評価を得る。クレスト活動を得たことで、私たちはこのプログラムを完結させる事ができたと思っています。

**Q. 最後に、クレストの協力企業に対して今後こんな関わり方をしてもらいたい**

と思うことがあれば、どうぞ。

A. まずは、生徒たちのモチベーションアップの意味で、豊橋は距離的に遠いですが、可能な限り、企業の方の訪問をお願いしたいです。

企業の方との接点という意味では、TV会議などのメディア機器を駆使した手法でもよいかもしれませんね。

それから生徒たちをひきつけ、本気度を高める最大のポイントは一層の現実感、リアルさだと思うので、プレゼンへの審査、助言では本音の厳しさを応答をお願いしたいです。

特に全国大会での先生方や企業人の講評は、生徒にとって最高の宝となるので、どんどん生徒に迫ってほしいと思います。

ミッションの内容については、単なる商品開発的なものではなく、教育的視点を含めた理念の高いものを、できる限り目指していただきたいと思います。

それから以前のクエストカップで、各企業本社での発表という年があったと思うのですが、あれはとても良かったと思います。

運営上大変かと思いますが、生徒や教師にとっては、自分たちの企画がその企業の社屋内で、しかもその企業の人たちを前に発表できる

ということとは緊張もすると思いますが、とても貴重な体験となると思います。このような形がまたできることを願っています。